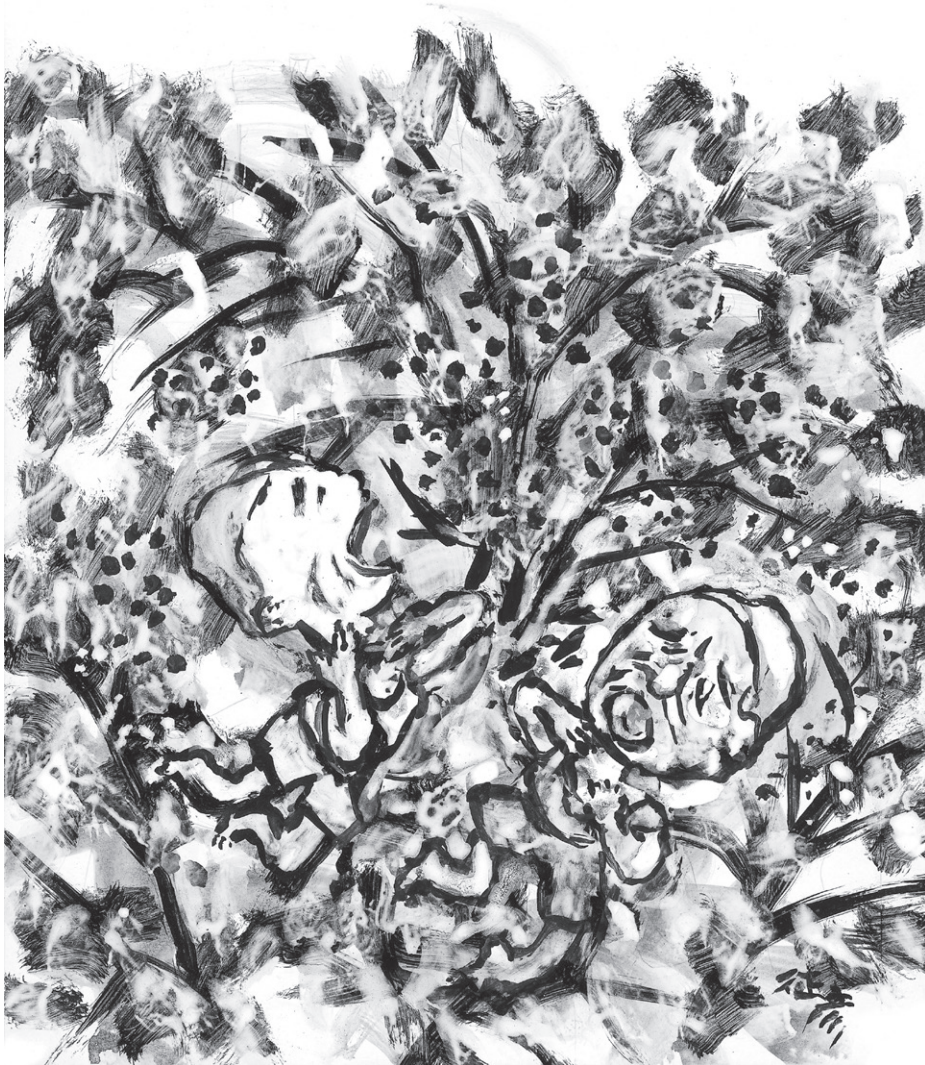


わたしの原風景

14

田島征彦

たじま ゆきひこ 絵本作家



大阪府の堺で一卵性双生児として生まれた。太平洋戦争の敗戦の年に、父の故郷、高知へ移住した。電気も水道もない山奥だった。ぼくの姓は植田だったが、父が一家六人で、家族のいない偏屈者の爺さんの養子に行くことになり、それで田島に変わったのだった。電気と水道もある、小さな集落へ引越して、そこから、ぼくらは一年遅れて小学校へ入学した。

学校へ入っても、ぼくたちフタゴの兄弟はほとんど二人きりで遊んでいた。いつも腹を空かしていたので、食べられるものを探して小川や山の中を歩き回った。

夏休み前の日曜日だったと思う。二人は、山の中をカズラにつかまって、ターザンのように暴れ回って、来たことのない谷間へ下りてきた。ふと見上げると、桑の木に似た灌木が赤い実を、たわわに付けていた。もぎ取って口に入れると、桑の実とは違ったドロリとした甘さだ。両手でむさばるように食べた。敗戦後の菓子類があまり手に入らぬ時だ。こんな甘いモノを口に入れるのは久しぶりだ。まだまだ枝にたくさん残っている。

そんなに慌てて食べることはないの、ひと息いた時だった。二人ののどを、同時に激しい痛みが襲った。のどの壁にたくさん針が刺さったような痛みだ。苦しさでのたうち回った。けもの道しか通っていない、誰も知らない山奥で死んでしまうのだ。恐ろしさのあまり、「助けて、おかあちゃん!!」と二人は、村の方へ向かって泣き叫んだ。しかし、ものの五分も経たない内に、のどの激痛はウソのように消えていた。

お互い言葉を失って、黙ったまま山を下りた。そのことは、二人のあいだでさえ、以後話題にならず、誰にも話すことのない秘密になった。

その木が、和紙の原料になるコウゾだと知ったのは、成人してからだった。